

定家と『千五百番歌合』(その五)

— 歌合百首 夏十五首 注釈 —

夏十五首

1021 郭公まつに心のうつるより袖にとまらぬ春の色哉

〔歌合〕 夏一 三百五番 右

〔参考歌〕 いつのまに花をわすれてほととぎすまつに心のうつるなるらん(為忠家後度百首 首夏郭公 頼政)

〔歌意〕 時鳥を待つことに心が移ってしまってからというもの、袖に春の色はもうとどまっていぬ。

〔語釈〕 ○郭公まつに心のうつるより||時鳥を待つことに関心が移ってから。春の花を惜しむ心から時鳥の初声を待つことに関心が移ったの意。「郭公まつに心」の詞統きは、参考歌の頼政歌が先例。頼政以降、宮内卿の「郭公まつにこころもふけにけり名残をとめよ明くる一声」(老若五十首歌合・五十七番)がある。○袖にとまらぬ春の色哉||昨日までの花色衣から夏衣の色に変わってしまい春の形見の色は袖に残っていない。「花の色に染めし袂の惜しければ衣替へうき今日にもあるかな」(拾遺・夏・八一 重之)、「惜しめども止まらぬ春もあるものをいはぬにきたる夏衣かな」(新古今・夏・

浅岡 雅子

一七六 素性)などと詠まれる春惜の情よりも時鳥を待つ心がまさるとした。「袖にとまらぬ」は、「いまつげむあまのみるめも恥かしく袖にとまらぬ玉や散りけん」(小大君・三五)が先例。

〔鑑賞〕 「更衣」題に「待時鳥」を組み合わせ一首を構成した。

春の巻軸に「夏の色」を、夏の巻頭に「春の色」を詠み込み、百首歌の構成を緊密にしている。昨日まであれほど惜しんでいた花を忘れて、今日はひたすら時鳥の初声を待つ、人の心の変わり易さと季節の移ろいを袖の色に象徴させた。「語釈」に挙げた重之歌や素性歌、あるいは千五百番歌合(三〇一・右)の俊成歌

衣こそかふともかへめ春の色にそめし心はいつか移らむ

に詠まれるように夏衣に脱ぎ替えても春に心が残るといふ通念に対して、時鳥を待つ心を強調するために惜春の情をあえて否定したところが新しい。「俟俊抄」が「郭公待つとて子規に心のうつるから、春も思みすて、袖にも残らぬといへり。めづらしくいひなしたる也」とするのもその点を踏まえてのこと。参考歌に挙げた頼政歌が人の心の移ろい易さを素朴にいぶかしんでいるのに対し、定家作は季節の移ろいを観念的に、ある意味で象徴的に捉えているといえよう。

1022 待つとせし人のためとは眺めねど茂る夏草道もなきまで

〔歌合〕 夏一 三百十九番 右（第二句「人のためには」）

〔本歌〕 我が宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせしまに（古今・恋五・七七〇 遍昭）

〔歌意〕 つれないあの人を待つために眺めはしないけれど、我が宿は繁茂する夏草に道もなくなるまでに荒れはてたよ。人の訪れもすっかり絶えて。

〔語釈〕 ○待つとせし人のためとは||待つている人のためには。本歌の下の句に拠る。歌合底本は、「人のためには」とする。○眺めねど||眺めないけれど。今はもう物思いに耽りながら眺めやることとはないが。『俣俊抄』に「詠ねど」といへるに、とても人はとはじといふ心こもれり」とある。人を待つためにはもう眺めることはないという諦念の思いがこもった表現。○しげる夏草道もなきまで||夏草は道をすっかり隠すほどに生い茂っている。通う人もなく荒れるにまかせそのままになっている庭の様子。結句を「道もなきまで」とした先行作に、同じ遍昭歌を本歌とする良経の「つれもなき人や待ちし山里は軒の下草道もなきまで」（十題百首 居処十首）がある。

〔鑑賞〕 本歌の「待恋」の時間の延長上に、もう待つことさえもなくなくなった女性の姿を描き出した作。「夏草」が主題ではあるが、恋物語の一場面を髣髴とさせる。「眺めねど」と否定することにより諦念の深さと、それでもなお想う人がかつて通ってきた道を見いださずにはいられない哀れとが描出されている。四季歌の中に恋の

(二〇)

要素を取り入れた新古今的な作であるといえよう。猶、定家は、

見せばやな待つとせしまの我宿を猶つれなきはこととはずとも

（九八〇、正治二年院初度百首）

つれなきをまつとせしまの春の草かれぬ心のふるさとの霜

（二四二三、建仁二年水無瀬殿恋十五首歌合 第四句「くちぬ心の」）

と、立て続けにこの遍昭歌の本歌取を試みている。

1023 時しらぬ里は玉河いつとてか夏の垣根をうづむ白雪

〔歌合〕 夏一 三百三十三番 右

〔関係撰集〕 風雅和歌集 夏・三〇八 「千五百番歌合に」

〔本歌〕 時知らぬ山はふじのねいつとてかかのこまだらに雪の降るらむ（伊勢物語・九段、新古今・一六一六 業平）

〔歌意〕 時節を知らない里は玉川の里であるよ。いったい今を何時と想って、夏の盛りの垣根を白雪が埋めているのだろうか。

〔語釈〕 ○時しらぬ里は玉河||季節を知らない里は玉川の里である。「玉川の里」は、歌枕。「六玉川」といわれるように「玉川」は各地にあるが、「卯の花」の名所は「卯の花さけるは撰津か」（『八雲御抄』）とされる。「見渡せば波のしがらみかけてけり卯の花さける玉川の里」（後拾遺・夏・一七五 相模）、「卯の花のさかぬ垣根はなけれども名にながれたる玉川の里」（金葉・夏・一〇一 忠通）と詠まれる。○いつとてか||今を何時の季節というの

で。初句と第三句は本歌の歌格をそのまま踏襲した。○夏の垣根をうづむ白雪Ⅱ夏の垣根をすっかり埋めている白雪よ。卯の花を「白雪」に見立てるのは常套である。

〔鑑賞〕 卯の花といふことを直接詠まないで主題の「卯の花」を表現したところが眼目。「俟後抄」は、「卯花ともなくてよめり。玉川といひ、夏のかきねといへるにて、卯花とは顕然たり。されども、大方の人はかくよみがたかるべき他」と定家の独自性を評価している。「卯の花」を雪あるいは月光に見立てるのは常套であり、真つ白に咲く卯の花の美しさは、

時わかず降れる雪かと見るまでに垣根もたわに咲ける卯の花
(後撰・夏・一五三、拾遺・夏・九四 よみ人しらす)

卯の花の咲けるあたりは時ならぬ雪ふる里の垣根とぞ見る(後
拾遺・夏・一七四 能宣)

など夏の垣根の雪と詠まれている。定家は見立ての伝統に則り、古今集的な「幼さ」を踏襲することで一首に典雅さを添えている。

1024 あふひぐさかりねの野辺にほととぎす暁かけて誰をとふらん

〔歌合〕 夏一三四四十七番 右

〔関係撰集〕 夫木和歌抄 夏一 二五〇五 「千五百番歌合」

〔参考歌〕 忘れめやあふひを草に引き結びかりねの野辺の露の曙

(新古今・夏・一八一 式子内親王 前小斎院御百首)

〔歌意〕 葵草を引き結んで枕とした野辺の仮寝に、時鳥が鳴いて

いる、暁方に先だつて誰を訪れるのであろうか。

〔語釈〕 ○あふひぐさⅡ葉葵の異名。賀茂神社の葵祭の神事に用いられた。「頼みすな御かきをせばみ葵草しめのほかにもありといふなる」(道綱母・七)、「悔しくぞ罪をかしける葵草神のゆるせるかざしならぬに」(源氏物語・若菜下 柏木)などと詠まれる。

○かりねの野辺にⅡ仮寝する野辺に。一夜まんじりともできぬまま明かした仮寝の床に。「俟後抄」に「『かりねののべ』は賀茂の神館をよめる歌どもにおほくみえたり。賀茂の名所をいへる者有。さもあるべき歟。又、祭使は夜をかさねても宿せざれば、ただかりそめのやどりゆへ「かりねののべ」といへるにや。此歌なども名所めきてはきこゆるにや」とある。定家の念頭には「参考歌」に挙げた式子内親王歌があったと思われ、神館での仮寝を想定していたと考えられる。○ほととぎす暁かけて誰をとふらんⅡ時鳥はこの暁方、いたい誰を訪ねるのか。「暁」は、夜明け前のまだ暗い時刻。明け切らぬ静寂の中の時鳥の鋭い声に、あの時鳥は、都の誰の元を訪れようとしているのかと思ひやっているのである。「郭公暁かけて」の典故は兼盛の「深山いでて夜半にやきつる郭公暁かけて声のきこゆる」(拾遺・夏・一〇一)。「俟後抄」が「『暁かけて』は『あふひ草』より『かけて』といへるなるべし」と指摘するように「かけて」は「葵草」の縁語。

〔鑑賞〕 主題は「郭公」。久保田『訳注』は「恋歌に通う艶な雰囲気の時鳥の歌」とする。定家は、斎院であった頃の式子内親王の面影を念頭にこの歌を作ったのかもしれない。猶、定家は承元二年にも、式子内親王歌の影響下に詠出した

思ひやる仮寝の野辺の葵草君を心にかくるけふ哉（二〇九八、
 続古今・夏・一九二）

を賀茂祭の祭使を任じた藤原忠明に贈っている。

1025 なほざりに山郭公鳴きすてて、我しもとまる杜のしたかげ

〔歌合〕 夏一 三百六十一番 右

〔関係撰集〕 風雅和歌集 夏・三三八 「題しらず」

〔参考歌〕 郭公声待つほど片岡の社のしづくに立ちや濡れまし
 （新古今・夏・一九一 紫式部）

〔歌意〕 時鳥はいいかげんに鳴き捨てて飛び去ってしまい、社の
 木の下蔭には時鳥の声ならぬ私が立ち止まっている。時鳥の声を待つ
 て。

〔語釈〕 ○なほざりにⅡ等閑に。いいかげんに。○山郭公鳴きす
 ててⅡ山時鳥が一声鳴いて飛び去っていった。『拾玉集』に「時鳥
 鳴き捨てて行く声の跡に心をさそふ松の風かな」（二九八三）、『二
 条院讀岐集』に「鳴き捨てて雲路過ぎゆくほととぎすいま一声はと
 ほざかるなり」（二二二）と同様の表現がみられる。○我しもとまる
 杜のしたかげⅡ時鳥の声ならぬ私が立ち止まる杜の木の下蔭よ。い
 ま一度時鳥の声が聞きたいためである。「杜のしたかげ」は勅撰集
 では、玉葉集初出。新古今期に開拓された表現である。

〔鑑賞〕 『俟後抄』に「ほととぎす、なほざりに跡もとどめず鳴
 きすてて過つれども、その一声ゆへ「又もやなく」と我しも「立」

とまるといへる也」とあるように、いま一声が聞きたいために立ち
 止まったのである。時鳥の声が余韻として残る作である。

1026 夕暮は鳴くね空なる郭公心のかよふ宿や知るらむ

〔歌合〕 夏一 三百九十番 右

〔本歌〕 五月山梢をたかみ郭公なくね空なる恋もするかな（古今・
 恋二・五七九 貫之）

〔参考歌〕 なき人の宿に通はば郭公かけて音にのみ鳴くと告げな
 む（古今・哀傷・八五五 よみ人しらず）

〔歌意〕 夕暮れ時は、時鳥も上空で鳴いているようだ。時鳥は、
 「なくね空なる」恋をしている私の宿を知っているのだろうか。

〔語釈〕 ○夕暮れはⅡ夕暮れ時は。夕暮れ時の時鳥は、「足引き
 の山時鳥里なれてたそかれ時に名のりすらしも」（拾遺・雑春・一
 ○七六 輔親）と詠まれ、また、『枕草子』にも「四月……すこし
 くもりたる夕つ方、夜など、しのびたる郭公の遠く空音かと」とあ
 る。○鳴くね空なる時鳥Ⅱ時鳥のうわの空の音が上空で聞こえる。
 「空なる」は掛詞。「私」と同様に時鳥は他に心を奪われているので
 ある。本歌に拠る表現。「鳴くねそらなる」「ほととぎす」の先例に
 「ほととぎすなくねそらなるものならば花橘の香をとどめなむ」（相
 模・三四二）、「うれたかみなくね虚なる郭公おとにききてや夏をす
 ぐらむ」（元真・四三）がある。○心の通ふ宿や知るらむⅡ心を通
 わしている宿を知っているのだろうか。参考歌に拠る。『俟後抄』

に『心のかよふ』は、我物思ひになくねそらなれば、おなじ心のやどをしりて、郭公も『なくね空なる』にやとよめるにや」とある。
 「鑑賞」 古今の貫之の恋歌を本歌として、恋の情緒を挿入した「郭公」題の作。

しののめに鳴きこそわたれ時鳥物思ふ宿はしるくやあるらん
 (拾遺・恋三・八二二) よみ人しらず)

と歌われるように、恋のものの思いをする宿を時鳥が訪れるのである。
 久保田「訳注」は、「忍び音や君もなくらんかひもなき死出の田長に心通はば」(源氏・蜻蛉 薫)を参考歌に挙げる。この歌は、浮舟の死を知った薫が、花橘が懐かしく香るある夕暮れ、「郭公の二声ばかり鳴きてわたる。『宿に通はば』と独りごちたまふも飽かねば」と、橘に添えて匂宮に贈ったものであり、浮舟の死への悲しみと匂宮への複雑な思いが込められた作である。夕暮れ時、二声ばかり鳴く時鳥、「宿に通はば」の引き歌、そのすべての情景がこの歌に通うものがある。定家の念頭にこの蜻蛉の巻の場面があった可能性は高いと考えられる。しかし、歌の基調をなすのは、哀傷の心ではなく、恋の心であろう。

1027 待たれつつ年にまれなる郭公五月許の声な惜しみそ

〔歌合〕 夏二 四百四番 右

〔関係撰集〕 風雅和歌集 夏・三四三 「千五百番歌合に」

〔本歌〕 鳴けや鳴けたか田の山の時鳥この五月雨に声なをしみそ

(拾遺・夏・一一七 よみ人しらず)

〔参考歌〕 あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人も待ちけり(古今・春上・六一) よみ人しらず、伊勢物語・十七段 あるじ)

〔歌意〕 待たれても一年のうちに希にしか訪れない時鳥よ。この五月だけでも惜しまずその声を聞かせて欲しい。

〔語釈〕 ○待たれつつ年にまれなる時鳥に皆に待たれながら一年のうちめつたに訪れない時鳥よ。初句が「待たれつつ」から始まる先行歌に俊恵の「待たれつつまれに鳴けども時鳥かたらふ声にえこそ恨みね」(林葉・二四五)がある。「年にまれなる」は、参考歌の古今歌が典拠である。○五月許の声な惜しみそにこの五月ばかりは声を惜しまないでくれ。「な……そ」は禁止を表す。せめて五月だけでも声を聞かせて欲しい。時鳥に「声な惜しみそ」とした歌は、本歌のほかにも多い。

〔鑑賞〕 主題は前歌に続いて「郭公」。下二句は、本歌の表現をほぼそのまま撰取している。時鳥への呼びかけも常套的であり、定家作としては発想も用語も平凡な作であるはあるが、時鳥の声を切望する心は表現されているといえよう。又、第二句に古今歌から「年にまれなる」という印象的な用語を挿入し、この歌に魅力を添えている。

1028 今日はいとどおなじ緑にうづもれて草の庵も菫浦葺くなり

〔歌合〕 夏二 四百十八番 右（第四句「草の庵に」）

〔歌意〕 五月五日の今日、草の庵はいっそう同じ緑に埋もれてしまった。それだけでなく草深い庵も菖蒲を葺くのであったよ。

〔語釈〕 ○今日はいとど〓今日という日はいっそう。五月五日の今日はますます。○同じ緑にうづもれて〓草の庵の緑と菖蒲草の緑と同じ色の緑に埋もれて。「同じ緑」の先行例は、「住吉の松も共にや思ふらん同じ緑の年を経ぬれば」（行尊・一四五）。定家は「六百番歌合」で「繰り返し春のいとゆふ幾代経ておなじ緑の空に見ゆらん」（廿四番 左勝、八〇九）と詠み、判者俊成は、「同じ緑のなどいへる末の句は優に侍るにや」とする。「緑に埋もれて」の先行例に「春ごとまつの緑に埋もれて風に知られぬ花桜かな」（金葉・春・三七 有仁）がある。○草の庵も菖蒲葺くなり〓草の庵も菖蒲を葺くのであった。歌合底本は「いほりに」とするが、歌合の他本の多くも「いほりも」とする。

〔鑑賞〕 主題は、「菖蒲草」。

今日見れば玉の台もなかりけり菖蒲の草の庵のみして（拾遺・

夏・一一〇 よみ人しらず）

と詠まれる五月五日の菖蒲草を「玉の台」ならぬ「草の庵」に葺いたところが新しい。草深い庵の緑に菖蒲草の緑を添え、「同じ緑に埋もれ」た緑一色の世界を現出させて見せた。久保田『訳注』は、参考歌として

おしなべてさつきの野辺を見渡せば水も草葉も深緑なる（寛平

御時后宮歌合）

を指摘する。

1029 天の河八十瀬もしらぬ五月雨に思ふも深き雲のみを哉

〔歌合〕 夏二 四百三十一番 右

〔関係撰集〕 夫木和歌抄 夏二 二九九〇「千五百番歌合」

〔本歌〕 天の河雲のみをにてはやければ光とどめず月ぞ流るる（古今・雑上・八八二 よみ人しらず）

〔参考歌〕 降り初めて幾日になりぬ鈴鹿川やせせも知らぬ五月雨の空（長秋詠藻・五二一、新勅撰・夏・一六四 第五句「五月雨のころ」）

〔歌意〕 天の川の八十瀬も分からないほど降りしく五月雨に、想像するだに深い雲のお（水脈）であるよ。

〔語釈〕 ○天の川八十瀬も知らぬ五月雨に〓天の川の八十瀬とも分からぬほど降り続く五月雨に。「天の川八十瀬」は『万葉集』の「天漢 八十瀬霧合 男屋之 時待船 今湧良之」（十・二〇五三）が先例。○思ふも深き雲のみは哉〓想像するだに深い雲の水脈であるな。雲の水脈は、雲が一際濃く流れているところ、幾重にも雲が重なったところ。良経に「かをるなり吉野の滝の雲の波そのみなかみを雲のみをにて」（五一二 南海漁夫百首）がある。

〔鑑賞〕 定家は『堀河院題百首』で

五月雨は天の河原も変はるらん八重立つ雲の浪の深さに（三二四 八九）

と、五月雨時の八重に立ちこめた雲から天上の川の五月雨の風景を想像した作を既に詠んでいる。この歌の延長上に詠まれた本歌取りの作。雲の流れを詠み込むことで歌に流動的な魅力を添えていると

いえよう。定家の万葉好尚の一端が窺える作でもある。

1030 袖の香を花橘におどろけば空に有明の月ぞ残れる

〔歌合〕 夏二 四百四十六番 右

〔本歌〕 五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする(古今・

夏・一三九 よみ人しらず、伊勢物語・六十段 男)

〔参考歌〕 ほととぎす鳴きつるかたをながむればただ有明の月ぞ残れる(千載・夏・二六一 実定)

〔歌意〕 花橘の香が漂い、昔の人の袖の移り香がしたようではと目覚めると、見上げた空にかつて見たと同じ有明の月が残っている。

〔語釈〕 ○袖の香を花橘におどろけば||目覚めると花橘の香が漂っている、昔の人の袖の移り香のように。本歌を凝縮したかなり強引な詞統き。花橘の香に昔の人を想起してはとするのである。○空に有明の月ぞ残れる||空には有明の月だけが掛かっている。「参考歌」の実定歌に拠る。「俟後抄」に「空にも昔にかはらぬ有明の月の残りて有といへるにや」とある。

〔鑑賞〕 主題は、「花橘」。「古今集」の名歌を本歌取し、さらに有明の月を挿入することで恋歌の余韻を持たせた作。「聞書B類注」に「是はうたたねなどして禰覚の当意にや空に有明といへるもその心と覚たり」とする。「新古今集」に

かへりこぬ昔を今と思寝の夢の枕に匂ふたちばな(夏・二四〇

式子内親王 正治初度百首)

五月闇みじかき夜半のうたたねに花橘の袖に涼しき(夏・二四

二 慈円 老若五十首歌合)

などの作もあり、夢の中で昔の人の袖の香が漂い、はっとして目覚めるという趣か。新古今期の季歌らしい恋の情趣が漂う作である。

1031 ひさかたの中なる河の鵜飼舟いかに契りて闇を待つらん

〔歌合〕 夏三 四百六十番 右勝

〔関係撰集〕 新古今和歌集 夏 二五四 「千五百番歌合」に、

定家卿百番自歌合 十九番 右勝

〔本歌〕 久方の中に生ひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる

(古今・雑下・九六八 伊勢)

〔歌意〕 月の中にある桂、その名に因んだ桂川の鵜飼い船は、いかなる因縁で闇を待つのだろうか。

〔語釈〕 ○ひさかたの中なる河||月の中に生えているという桂の名を持つ桂川。「ひさかた」は月、光などに懸かる枕詞であるが、ここでは本歌と同様に月を指す。「月の桂」の伝承から桂の里を「久方の中に生いたる里」と詠んだ伊勢作に拠って「桂川」をこう表現した。○鵜飼舟いかに契りて闇を待つらん||鵜飼いの船はいかなる前世の約束で闇を待つのだろうか。「鵜飼い」は万葉集にも登場するが、来世の闇との関係で詠まれたのは、『久安百首』の崇徳院作「はやせ川みをさかのぼるうかひ舟まずこの世にもいかがくる

しき」（千載・夏・二〇五）が最初。

「鑑賞」 新古今入集歌。「鶴飼舟」が主題。鶴飼い舟は闇の中で殺生をするゆえに、無明の闇、来世の闇を想起させる。そして、闇の中に輝く鶴飼い舟の篝火の光との対比で詠まれることも多い。定家も『六百番歌合』で

をちこちに眺めやかはず鶴飼舟闇を光の篝火のかげ（夏上・廿一番 左負、八一九）

の一首を詠じている。この歌の延長上に、より鶴飼い舟の哀れを深めた作と言えよう。桂川を「久方の中なる河」とすることで、「闇」との対照が鮮明になっている。歌合では隆信の

旅人の友よびかはず声すなり夏野の草の道まよふらし

と番えられたが、良経判は「任他草野行人路 只翫桂河漁客船」と定家作を高く評価し、勝とした。

1032 夏衣たつた河らをきて見ればしのをりはへ浪ぞ干しける

「歌合」 夏三 四百七十四番 右勝

「本歌」 河社しのをりはへ干す衣いかにほせばか七日ひざらん（新古今・神祇・一九一五 貫之）

「参考歌」 夏衣たつたの川をきてみれば風こそなみのあやはおりけれ（能宣・一〇五）

「歌意」 立田河原に来てみると、波こそが、夏衣を頻り長く延ばして干しているのであった。

「語釈」 ○夏衣たつた河原にきてみれば〓夏衣を裁って着るではないが、立田河原に来てみると。「たつ」（立つと裁つ）と「きて」（来てと着て）は衣の縁語でそれぞれ掛詞。参考歌に挙げた能宣集の上句に拠る。「立田川」は、大和の歌枕。奈良県生駒郡斑鳩町竜田に流れる川で紅葉の名所。○しのをりはへ〓頻りに長く延ばして。「俟後抄」は「しのは、しげき心なり」とする。又、「六百番歌合」の頭昭歌（恋九・十九番 左負 「寄衣恋」）めぐる判において俊成が「かの河社しのにといへるは、繁く常になどいへる古き詞也。万葉集などにも詠みつかひて待めり。おりはへてといふ、又同事なり」と述べている。「聞書B類注」に「しのにおりはへといへるも波の事也。波の立を衣に見なしたる心也」とある。「俟後抄」が、「しのに波をおり、衣としてはしたりといへる也」（加筆墨書）とする。○浪ぞ干しける〓波こそが夏衣を干しているのであった。に「俟後抄」に「波を衣にみたてていへるにや」とする通り白波を夏衣に見立てた。

「鑑賞」 新古今入集の貫之歌を本歌とした見立ての歌であり、かつ「裁つ」、「着て」と「衣」の縁語で纏めた技巧的な作である。本歌の貫之の歌は、「河社」という用語の解釈が多くの歌論書において問題にされている歌である。俊成が、「語釈」に挙げた頭昭歌をめぐる判詞において「衣といふは実の衣にはあらず。きぬをほしたるに似たる事を云也」と見立ての歌であるのに対して、頭昭が『六百番陳状』で反論するなど、御子左家と六条家の歌字が真に向から対立する説を立てている。

定家は、父俊成の説を忠実に受け、立田河に立つ白波の景を衣に

見立て、縁語・掛詞で作品を仕立て上げた。紅葉の名所の立田川の白波を夏衣に見立てたのは、秋の紅葉の錦を意識してのものである。歌合では、小侍従の万葉歌から用語を採り入れた

真葛はふ夏野の草のしげくのみたれをうらみて露こぼるらん
と番えられた。良経の判は「縦教葛葉成其恨 河水曝衣叶夏心」とし、涼やかな川辺の景を詠んだ定家作を勝としている。

1033 夏の月はまだ宵の間とながめつつぬるや川辺の東雲の空

〔歌合〕 夏二 四百八十八番 右負(初句)「夏の夜は」

〔本歌〕 夏の夜はまだよひながらあげぬるを雲のいづこに月やどるらん(古今・夏・一六六 深養父)

〔参考歌〕 朝柏ぬるや川辺のしのめの思ひて寝れば夢に見えつつ

(新勅撰・恋二・七二四 よみ人しらず、万葉・卷十一・二七六四 第五句「夢所見来」)

〔歌意〕 関八川の川辺で、夏の美しい月をまだ宵の口と思いがら眺めているうちに微睡んでしまった。目覚めるともう東雲の空は、明けようとしている、あの月は何処に宿っているのだろうか。

〔語釈〕 ○夏の月は夏は夏は。本歌に歌われる明るく美しく照らす月は、歌合の段階では、「夏の夜は」と本歌そのままに撰取。家集に入れるときに改作した。「月」とすることで眺める対象を明確にするのと同時に、本歌に依拠しすぎるのを避けたのであろう。○まだ宵の間と「まだ宵の口」と。本歌の「よひながら」を「宵の間」

とした。いずれも夏の短夜を強調するための表現。○ぬるや川辺の「寝たことだ、関八川の川辺の。「ぬるや川」は、「寝る」と「関八川」の掛詞。「関八川」は、参考歌に挙げた新勅撰歌(原歌万葉)あるいは「秋柏 潤和川辺 細竹目 人不顔面 君無勝」(万葉集・卷十一・二四八二)に詠まれる「関八河」又は「潤和川」であろう。「八雲御抄」・「歌枕名寄」などに採り上げられているがいずれにしても所在地不明。静岡県富士市の白糸の滝に発し、富士市を経て駿河湾に注ぐ潤井川が訛ったものとする説もある。○東雲の空「夜明け方の空。「しのめ」は夜明け直前のまだ薄暗い、ほんのり夜が明け初めようとしている刻限。

〔鑑賞〕 夏の月の美しさと夏の夜の短さを強調した深養父の歌を踏まえ、さらに万葉の地名を掛詞として採り入れた作。「語釈」でも触れた「夏の夜」から「夏の月」への改作は、「月」を詠み込むことによって、本歌の夏の美しい月を惜しむ心を余情として活かしたかったからであろう。「参考歌」の万葉歌を撰取した作としては家隆の

おきて行く袖のみぬれてあさかしはぬるや川辺の夢をだにみず
(家隆卿百番自歌合・六十五番右)

がある。定家歌との先後関係は不明であるが、この時代の歌人の万葉好尚の一端を窺い知ることができる。歌合では、忠岑の「久方の月の桂も秋は猶もみちすればやてりまさるらん」(古今・秋・上・一九四)を本歌取した讃岐の

夏のよの月のかつらの下紅葉かつが秋のひかりなりけり
と番えられ、良経に「只翫桂花秋色染 夏宵不憶一夢成」と負とさ

れている。

1034 山のかげおぼめく里まきにひぐらしの声こゑたのまるる夕顔ゆがはの花

〔歌合〕 夏三 五百二番 右負

〔関係撰集〕 夫木和歌抄 夏三 三五〇八 「夕がほ」

〔本歌〕 ひぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬと思ふは山の陰にぞありける(古今・秋上・二〇四 よみ人しらず)

〔歌意〕 山の陰で暗いのか、日が暮れてしまったので暗いのかはつきりしないこの里で、日暮れを告げる蜩の声がする。その声を頼みに白い花を咲かせる夕顔の花よ。

〔語釈〕 ○山のかげおぼめく里に〓山の陰にあるために暗いのか、日が暮れたために暗いのかはつきりしない里に。本歌に拠る。『国歌大系』は「山の陰にあるらしい里」とする。○ひぐらしの声たのまるる〓蜩の声を頼みとしている。「ひぐらし」は、蜩・茅蜩。早朝や夕方、あるいは曇天時にカナカナと高い金属音で鳴く。「声たのまるる」は、古注でもいくつかの解釈に分かれている。例えば、『常縁口伝』では「夕顔の咲きたるを見て、暮れやらぬとしるぞと也。それを『声たのまるる』とはいへり」とし、『聞書B類注』でも「此おぼめくひぐらしの声を夕がほのさけるを見て暮れはてぬと心うるなり。それをこゑたのまるるとはいふ也」とする。それに対して、『聞書C類注』は、「まことの夕がほならば、夕になりてよくみえんほどに、日ぐらしのこゑをたのむよし也」とする。又、『摘

抄』は、「夕がほの花ゆへか、又暮たるかくれぬかとおぼめく時分に、日ぐらしのくれよ〜と鳴くを聞て、さては漸暮るるよ。……日晩のこゑ夕のしるべとなるよし也」、『俟後抄』も「日ぐらしの声すれば、日ぐれに成ぬるとたのまるるにや」とする。○夕顔の花〓白い花を咲かせている夕顔の花。夕顔は勅撰集では、新古今集初出。『聞書C類注』は「げんじに、しろくさけるを夕顔となん申」と「夕顔」巻を指摘している。この作は直接の影響下にはないと考えたが、新古今入集の「白露のなさけおきけることの葉やほのぼの見えし夕顔の花」(夏・二七六 頼実)など源氏物語の影響下に詠まれた作は多い。

〔鑑賞〕 主題は「夕顔」。夕暮れの薄明の中に浮かび上がる夕顔の白さが印象的な歌である。本歌から山陰に鳴く蜩の声を導入して、晩夏の納涼の心も感じられる。源氏物語からの直接の影響は認めがたいが、どこか頼りなげな夕顔の花の風情は物語の女主人公のイメージと結びつき、この作にも儚げな風情を与えているといえる。歌合では、宮内卿の新古今入集歌

片枝さすをふの浦なし初秋になりもならずも風ぞ身にしむ(夏・二八一)

と番えられ「負」とされた。良経の判は、「山陰花色雖難弁 猶勝秋風浦樹枝」。定家作の山陰の花の風情も棄てがたいとしながらも、古今集の「をふの浦に片枝さし覆ひなる梨のなるもならずも寝て語らはむ」(東歌・一〇九九)を本歌として、夏から秋へ移りゆくとうとする季節の変わり目を興味深く捉えた宮内卿作を高く評価したのである。

1035 誰がみそぎ同じ浅茅のゆふかけてまづ打ちなびく賀茂の河風

〔歌合〕 夏三 五百十六番 右勝

〔関係撰集〕 夫木和歌抄 夏三 三三三九 「荒和歌」

〔本歌〕 誰がみそぎゆふつけ鳥か唐衣立田の山にをりはへて鳴く

(古今・雑下・九九五 よみ人しらず、大和物語・一五四段 男)

〔歌意〕 誰のみそぎなのだろう、同じ浅茅の木綿だすきをかけているのは。この夕暮れ時、賀茂の河原の涼しい川風に浅茅が靡いている。

〔語釈〕 ○誰がみそぎ〓誰のみそぎなのか。本歌の初句をそのまま振り入れた。○同じ浅茅のゆふかけて〓同じ浅茅の木綿だすきをかけて。夏越祓に茅・真菰などを束ねて輪とし、鳥居や拝殿前に置き、参詣人がくぐって厄疫を祓った。『聞書B類注』は「諸人の夏祓也」とし、『俣後抄』は「今も賀茂には茅にて人かたを作りて、はらへにながすと也。されば、人かたにせざる浅ぢも、おなじことゆふかけて川風になびくといへるにや」とする。また久保田『訳注』は「賀茂川原に浅茅が靡いている。誰が同じ浅茅で輪を作り」としている。「ゆふ」は「木綿」と「夕」の掛詞。○まづ打ちなびく〓まず河原の浅茅が風に打ち靡いている。○賀茂の川風〓賀茂の河原に吹く涼風。夏越祓は、陰暦水無月三十日に行われた京都上賀茂神社の神事が有名。

〔鑑賞〕 主題は「夏越祓」。本歌の初句を採り入れ、「ゆふつけ鳥」の「ゆふ」を掛詞として活かした手慣れた本歌取の作品。定家は「皇后宮大輔百首」に夏の巻軸においても

みそぎ川からぬあさぢの末をさへみなひとかたに風ぞなびかす
(二二五)

と六月祓の川原の涼しさを詠じている。刻限を夕暮としたことで、川辺の涼しい景がいつそう鮮明に描出されているといえよう。そして、この川辺を吹く涼風が秋の巻頭の初風を導き出すのである。歌合では、季能の

みな月のなごしのもりの夕すずみみそぎもまたぬ秋のした風
と番えられた。良経は、季能歌を「強求杜号其何益 未敢見聞秋下風」と難じ、定家作を勝とした。

注記 『拾遺愚草』本文は、藤原定家自筆本『拾遺愚草』（冷泉家時雨亭叢書第八卷）による。表記の方針、および主な引用作品の本文は、拙稿「定家と『千五百番歌合』(その三)―歌合百首 春廿首 注釈―」(北星学園大学文学部北星論集第三十四号)の凡例に従った。